

平成 27 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	管 27K03	氏 名	畑 大介
研究主題 —副主題—	小学校第 5 学年算数における相互教授法 (RT) の介入効果 —発言に消極的で、学習理解の低い児童に目を向けて—		
所属校	西東京市立田無小学校	派遣先	玉川大学教職大学院

項 目	内 容
I 研究の目的	<p>理解や思考を深める、広げる、高めることができる言語活動の一つである相互教授法 RT は、学習過程を外化（自分の考えを他者に説明するために、文章を書いたり、図を使ったりし、思考の過程を見えるようにすること）し、異なる役割のものとの相互作用により、理解や思考の深化を促すものであり、様々な授業への適用、その効果が期待できるものとされている。算数科の話合い場面は相互に関わり合うことが多いため、相互作用を構造化する（役割分担や話合いの手順提示により、個人の思考を説明によって外化させ、それに対する質問や応答の繰り返しを通じて、内的思考を促しつつ、学習過程を進行させる）RT を取り入れていくことは有効であるとされている。</p> <p>本研究の目的は、算数科において、この RT が発言に消極的で、学習理解が低い児童（L 群）に対して、どう作用していくかを、友達との積極的な交流、学習理解の深まり、思考の高まりの三つの視点から明らかにしていくことである。L 群が積極的に学習に参加し、相手との関わりの中で思考することで、曖昧な理解が明確になることを期待している。</p>
II 研究の方法	<p>1 基礎研究 (1)協同学習について (2)相互教授法 RT について</p> <p>2 事前アンケート 事前アンケートを実施し、発言に積極的であり、学習をよく理解している群（以下、H 群）、発言に消極的であり、学習をはっきりと理解できていない群（L 群）、その間に位置する中間群（M 群）に分けた。さらに、通常の算数の授業を観察したり、担任へ聞き取りしたりすることで、各児童がどの群に属しているかを最終決定した。</p> <p>3 ペア・グループメンバーの決定 ペアの組み合わせは H 群と L 群が組み合うように、グループには H 群が必ず入るようにした。</p> <p>4 授業（7 月 都内公立 A 小学校 第 5 学年 3 学級） 各学級で抽出した対象児（L 群 7 名）の様子を検証する。 (1) 学級 A 対象児 A 児、B 児 授業① 教師主導で授業展開をし、RT 介入をしない (2) 学級 B 対象児 C 児、D 児 授業② ペア・グループの組み合わせのみの RT 介入 (3) 学級 C 対象児 E 児、F 児、G 児 授業③ ペアの組み合わせに加え、話合いの構造化の RT 介入 (4) 三つの授業を分析・考察</p>

	<p>5 授業④（9月 都内公立A小学校 第5学年3学級）</p> <p>授業③の条件を「ペア・グループ活動を一層明確に構造化すること」「ペア・グループ構成の再調整」の点で改善し、対象児の変容を検証する。</p> <p>(1) 学級A～C 対象児 A児～G児</p> <p>(2) 3つの授業を分析・考察</p>
<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>7月から9月における対象児の3つの視点における変容を以下に示す。</p> <p>(1) 学級A（対象児 A児、B児） A、B児とも積極性が増した。</p> <p>(2) 学級B（対象児 C児、D児） C児は積極性、学習理解、思考力の高まりの三つの視点について、上向きの変容が見られた。D児の積極性は下降したが、思考力の高まりは上昇した。</p> <p>(3) 学級C（対象児 E児、F児、G児） F児の思考の高まり、G児の学習理解は上昇したのを除いて、どの視点とも変容は見られず、状態は維持されたままだった。</p> <p>(4) L群の分類 各結果から、対象児7人を特徴的な三つのグループに分けることができた。二つ以上の視点が上昇した<math>\alpha</math>グループは、発話が多く、友達と積極的に交流し、学び、考えることができた。一つの視点のみ上昇した<math>\beta</math>グループを、発話の量でさらに二つに分けると、<math>\beta 1</math>グループは発話が多く、友達と積極的に交流し、学ぶことができ、<math>\beta 2</math>グループは発話が少なく、友達と積極的に交流できなかった。どの視点も上昇しなかった<math>\gamma</math>グループは発話が多く、友達と積極的に交流できるが、理解は不十分だった。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>本研究を通して、指導者がL群に個別に指導を繰り返さなくても、相互教授法RTを施せば、L群は友達から自発的に学び、学習事項を獲得していくという知見を得ることができた。また、思考の高まりにも効果があることが明らかとなった。さらに、授業④で見られた対象児の変容から、RTを運営する上で「ペア・グループ活動の手順を詳細に示すこと」「ペアの相手・グループのメンバーの組み合わせを相性までも考慮して検討すること」の二点を意識することで、一步上の効果を生み出すことも検証結果からもはっきりと示された。</p> <p>しかしながら、児童の特性によって、RTの効果の度合いにばらつきが見られた。<math>\beta 2</math>グループに属する児童には効果が薄く、特にB児は友達と意見を交流することができず、理解もできなかった。RT実施後は個人だけでなく、グループの活動を振り返ったり、グループ内で他己評価をしたりする時間を設ける等、運営面で工夫をしたり、司会者をはじめ聞き手が考えを引き出していくような質問や応答ができるような話合いの構造化を図ったりして、RT自体の質を高め、取り残されるL群を減らしていきたい。</p>